

～コウノトリが運ぶ地域の誇り～

兵庫県北部の日本海側に面する豊岡市は、人口8万9000人の小さなまちですが、一度絶滅したコウノトリを人工飼育し、さらに野生に帰すという、世界的にも成功例の少ない取組を成功させたことで知られています。その野生コウノトリが日本国内の自然界で絶滅したのは、1971年のことでした。乾田化(冬期に田んぼの水を抜くこと)や農薬使用による餌となる生きものの激減が原因です。

1965年から開始されたコウノトリの人工飼育は、まさに悪戦苦闘の連続でした。全く孵らない卵を見守り続けた松島興治郎氏(現豊岡市立コウノトリ文化館名誉館長)のもとにも、人工飼育は無駄ではないのかという意見が投げかけられました。そして、人工飼育開始から24年が経った1989年、待望のヒナが誕生します。しかしそれは、コウノトリの野生復帰プロジェクトという新たな挑戦の始まりでした。野生復帰のためには、エサとなる生きものがたくさんいる環境に加え、おらかな文化が必要です。例えば、野生復帰したコウノトリが苗を踏んでしまっても、その被害を許容できるだけのおおらかさが必要なのです。

そこで、豊岡市役所が中心となって、豊かな自然と文化の回復に取り組むことになりました。「コウノトリ悠然と舞うふるさと」をめざすまちの将来像に掲げ、【1】安心と懐かしさ、地域への愛着を感じる 【2】自然

や歴史、伝統や文化を大切に 【3】穏やかさと安らぎに満ちる 【4】人々が夢と希望を抱きながら活躍、などを柱に掲げました。コウノトリが生息できる環境が整ってきた2002年に大陸の方から野生コウノトリが豊岡に飛来し、2005年にはコウノトリの放鳥が開始されました。現在では、44羽が豊岡市の空を舞い、人工飼育されているコウノトリは99羽にまで増えました。また、コウ



放鳥後、自然界での繁殖により順調に数を増やし、現在では44羽のコウノトリが天空を舞っております。

ノトリと共生する農業も実を結びつつあり、休耕田を利用したピオープ水田、冬期にも水をはった冬期湛水水田といった取組も増えてきています。コウノトリ育む農法と名付けられた無農薬及び減農薬の水田も市内約3,000ha中220haまでに増えてきました。当初は、なぜコストをかけて飼育しなければいけないんだ、なぜ無農薬や減農薬といった手間のかかる農業をしなければいけないんだと、批判していた人々の中に

も、今年はずちの水田に飛んできてくれるかな、とコウノトリを心待ちにする声が上がるとなりました。

コウノトリ育む農法で栽培されたお米は「コウノトリ育むお米」として、通常より約4～6割増しの値段で販売されており、非常に好評とのこと。お米だけでなく、野菜や日本酒などもブランド化され、安心な農作物として高い評価を受けるようになりました。取り組みは注目を集め、現在では日本各地にコウノトリを誘致し、自然と農業が共生したまちづくりと農産品のブランド化をめざす運動が広がっています。また、コウノトリ文化館の入館者数も2009年度には37万人となっており、慶応大学の大沼あゆみ教授と富山大学の山本雅資准教授の試算によるとコウノトリによる観光客増加による経済波及効果は年間10億円になると計算されています。

人里でコウノトリが生息できる環境を取り戻すためには、住民がコウノトリの生息に十分理解しながら生活する文化の力と、地域を誇りに思う意識が必要です。そしてこの文化力と誇りは、高い経済効果となって地域に還元されているのです。ヨーロッパにはコウノトリが子どもを運んでくるという言葉があります。ここ豊岡では、コウノトリが運んできたものは、地域の誇りでした。

【地域の誇り】復活推進会議



今では人とコウノトリが共存する風景も日常的になりました。



無農薬農法で栽培された「コウノトリ育むお米」。地元では人気が高い!



コウノトリも棲める環境づくりに取り組んでおられる豊岡市コウノトリ共生部 環境政策係の若森氏。



「コウノトリ本舗」にはコウノトリに関連した商品が数多く販売されており、ます。